

全国脊柱靱帯骨化症患者家族連絡協議会（土屋義幸）

人間の背骨（脊柱）は頸椎、胸椎、腰椎部分にわかれ、全部で24個の椎骨で構成されていますが、その椎骨を連結する後縦靱帯、黄色靱帯、前縦靱帯を総称して脊柱靱帯といます。

このうち、脊髄神経を保護する脊柱管の周りに存在する靱帯は後縦靱帯、黄色靱帯でありこれらの靱帯が何らかの原因で骨化をして厚くなることによって脊髄を圧迫し、さまざまな神経障害を起こしてきます。

骨化の部位により後縦靱帯骨化症、黄色靱帯骨化症、前縦靱帯骨化症といますが、それぞれ単独での発症、あるいは併合して発症することも少なくありません。

症状としては手足のしびれ、全身の痛み、知覚障害、運動障害による歩行困難、排尿・排便障害など個人差はあるもののさまざまな障害をもたらし、介助生活を送っているものも少なくありません。

治療としては重篤の場合、手術により脊柱管を拡大し脊髄を圧迫から解放するなどの方法がありますが、治療成績は手術の時期等により画一ではなく、再発するものも少なくありません。

特に黄色靱帯骨化症は胸椎に発生することが多いといわれていますが、胸椎の手術は頸椎に比較し格段に難しく治療成績も厳しいものがあり、研究班でも鋭意研究が続けられています。

後縦靱帯骨化症は既に特定疾患治療研究事業の適用を受けていますが、平成19年3月末で医療受給者証の交付を受けているものは約2万5千名、この10年間で約1万名の増加となっています。

しかしながら、後縦靱帯骨化症と症状がほぼ同一とされているものの黄色靱帯骨化症は治療研究事業の適用となっておりません。

ここ数年、毎年厚生労働省に対して治療研究事業の適用について要望しておりますが残念ながら実現に至っておりません。

ここにあらためて治療研究事業への適用を強く要望するものです。